

## 巻 頭 言

## 年 頭 所 感

所 長 岡 田 恒 男  
OKADA, Tsuneo



新年に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

昨年は両ドイツの統一、中東湾岸紛争など世界情勢が大きく動いた年であったと言えます。日米摩擦も依然として厳しい情勢にありました。ヨーロッパ諸国統合へ向けてISO単位導入の勢いも加速されようとしています。大学の内外では、大学のあり方を巡ってさまざまな議論がなされました。本所においても、研究・教育を推進して来たことは言うまでもなく、研究所の将来計画についてもさまざまな検討を加えて参りました。

一年前、私は、研究・教育に関する本所の課題として、一つの使命と複数の総合目的をもつ大学付置研究所の存在意義の確立と、研究・教育のための施設・設備の整備を取り上げました。これらについては、昨年度より新しく刊行された隔月の生研ニュース第4号にその概要を発表しましたように、第6次将来計画委員会報告として昨年7月にまとめることが出来ました。従来我々が求めてきた都市型総合工学研究所としての本所の進むべき道をこのなかにかなり明確に示すことが出来たと考えております。

ここでは、我々が対象とする工学の近年の変容を分析し、それが、①量から質への社会的価値観の変化、②自然環境と人工環境との調和と協調の必要性、③世界と共に歩む技術を求める国際性の重要性、などに起因していることを指摘し、これらを発展させ新しい工学の創成を目指す「創造と融合の発信の場としての大学付置研究所」として本所を位置づけています。また、「生きた多彩な情報を集約し総合工学研究を推進するためには、その組織が価値ある情報を生み出し続ける情報発信の場であると同時に、内外の多彩な人間が日常的に集まり、目的を限定しないface-to-faceなふれ合いを保つことにより情報を伝播・共有する場を形成していくことが必要であり、これが本所の重要な使命でもある。」とも定義しています。このため、研究所の本来の目的である工学の基礎研究・基盤研究ならびに大学院レベルの教育に加えて、①情報広場、②Transdisciplinaryな研究基盤、③社会に開かれた研究体制、④社会に開かれた教育体制、などの整備の必要性が指摘されています。さらに、今後の工学における研究・教育の質を高めるためには、「文化としての工学」の樹立が不可欠であるとの認識も生まれています。都市型の総合工学研究所のイメージが出来上がりつつあると言って良いでしょう。

これらについては既に実行してきたものも多数あります。昨年の6月には恒例の本所の一般公開を行い、6,000人に近い見学者を迎えました。11月には千葉実験所の公開を10年ぶりに催しましたが、来所者は600人を超えました。生研講習会、生研セミナー、生研基礎講座、生研公開講座なども例年にもまして盛況でした。社会に開かれた大学付置研究所の活動の一端であろうかと考えます。また、昨年は建築学の分野で関野克名誉教授、土木工学の分野で岡本舜三名誉教授が文化功労者の栄に浴されました。我々の目指す文化としての工学を既に先輩である両先生が実行されていたのだとの思いを強くした慶事でした。しかしながら、まだその姿が具現化していないものも多々あります。姿・形として、また、制度として、そして成果として現していくのがこれからの課題です。特に、研究環境の整備と大学付置研究所としての本所における教育の充実は今年度の大きな課題としたいと考えます。

年頭に当たり所長としての所感を述べ、皆様のご支援を強くお願い致します。